

論文

中国の字書・辞典における積義文からみる色彩修飾語の特徴に関する研究

The Characteristics of Color Adjectives Defined in Chinese Character Books

林 雪雰 Lin Hsueh-Fen

雲林科技大学設計学研究所

Graduate School of Design, National Yunlin University of Science & Technology

曾 啓雄 Tseng Chi-Hsiung

雲林科技大学設計学研究所

Graduate School of Design, National Yunlin University of Science & Technology

Abstract

This study investigated explanations from 7 ancient Chinese character books and one modern dictionary to elucidate the characteristics of color adjectives in Chinese. Both in the past and present, color adjectives, such as the colloquial words “浅(pale),” “深(deep),” “鮮(fresh),” and “暗(dark),” are essential vocabulary used to describe colors. In the present day, the number of adjectives composed of compound words and groups of words, and in particular, the number of compound-word adjectives of the form “adverb + adjective,” has increased. “最浅(palest)” and “不純(impure)” serve as prominent examples of this phenomenon. By contrast, color adjectives in Chinese from the ancient Chinese character books and modern dictionary were analyzed via three attributes of color, color adjectives tended to describe saturation rather than brightness, and more often referred to texture, color's images, and its valuation. Color adjectives commonly used in ancient Chinese character books, such as “深(deep),” “浅(pale),” and “正(pure),” have become “淡(light),” “微(tint),” “深(deep),” and “暗(dark),” in modern dictionaries.

Keywords: color adjective, color vocabulary, character book, dictionary

要旨

本研究は、中国古字書7冊と近代辞典1冊の積義文により、色彩修飾語の特徴を理解することを目的とする。今も昔も色彩修飾語は色彩語彙を構成する重要な要素であり、また「浅」、「深」、「鮮」、「淡」、「暗」は常に使用されてきた修飾語と考えられる。近代辞典においては、複合語と句の数が増え、特に「副詞+形容詞」タイプの複合修飾語、例えば「最浅」と「不純」といったものが多い。一方、色彩の三属性により古字書と近代辞典の修飾語を分析すると、彩度を表す修飾語の数は明度のそれより多く、また色彩の質感やイメージ、評価などを表現する修飾語が存在する。色彩の類別によって分類すると、古い字書において、各色彩で多く使用される修飾語は「浅」、「深」と「正」があり、近代辞典においては「淡」、「微」、「深」と「暗」がそれぞれである。

キーワード：色彩修飾語，色彩語彙，字書，辞典

1. 研究背景と既往研究

色名は色彩を表現する「言語」であり、また色彩語彙は多様な表現方法を有している。修飾語を適切に運用することで、色彩の変化とグラデーションがより精確に伝達できる。異なる言語や文化などといった要素の影響により、当該文化に属する独特の色彩文字と修飾語が現れてきた。

中国語の色彩修飾語の研究成果には次のようなものが挙げられる。駱峰^[1]は重ね型色彩語彙の構詞類型を主に下記の二種類の表現方式に分けた。一つは前置型であり、色彩を表す文字の前に修飾成分を加える。例えば、大紅、浅紅などがそうである。もう一つは後置型であり、色彩を表す文字の後に修飾成分を加える。例えば、白花花、黒歴歴などがそうである。呂清夫^[2]は哲学、宗教、言語学、文学、自然科学、応用科学、社会、歴史地理及び芸術の九つの分野から、55冊の書籍を選び出して、色名の修飾語をまとめた。その結果、修飾語を使用頻度順に並べると淡、深、暗、浅、灰、黒、鮮、大、濃、艶、微、純、墨、黝、抹、蔚、潔、汚、白、嫩となった。林岱瑩^[3]は『色譜』と『中國色名綜覽』を考察対象とし、修飾語を使用した色名をまとめた。回数順に並べると集計し、修飾語を使用した色名が計89個あり、その中に、使われた回数の最も多い修飾語は淡であり、その次は、暗、深、嫩、浅、翠、蒼、中、明、品、新、枯、焦、清、蔚、鮮、豔、大、褪色、隱、潤となった。そして、林氏も『中國の傳統色』を研究し、色名に使用された修飾語は計63個あり、修飾語が現れた回数の多い順から、深、浅、淡、暗、嫩、中、鮮、品、蒼、大、明、新、枯、正、粗、閃、豔、翠、夜と並べられる。李紅印^[4]は現代辞書や過去の著作を集めて、880個の色彩語彙をまとめた。その中には、深、浅、淡、大、通、暗、湛、煞、魅、嫩、老、暖、鮮、嬌、枯、新、死、姪、慘、寡、刷、純などの修飾語が含まれている。

先行研究をまとめると、考察対象や書籍の出版時期により、色彩修飾語に関して異なる結果が生じる。また、中国古代字書や辞書を考察対象とする色彩修飾語の研究成果はまだ見られていない現状がある。上述したことに基づき、中国漢語系統下の色彩修飾語を理解するために、歴史的に重要な8冊の字書・辞典を調査対象とし、書籍に記載されている内容により、中国人の色彩観の依拠を分析・研究する。

2. 研究目的

字書や辞典を研究対象として選定する理由は、その長い発展史にある。遡ると、周宣王時代(紀元前827～前782年)に、中国最初の文字の教科書『史籀篇』はすでに存在していた。この本は最初に児童のための教科書であったが、次第に文人達のための重要な字書に変遷していた。文字の形体や発音、意味の説明に関しては、ある程度先行研究が存在している。また一方で、字書と辞典に記載されている内容は時代の変化とともに修正されており、出版時期の前後から、文字の発展状態を推測することもできる。

字書・辞典は文字の意味を理解するための書籍であり、内容によって、収録語彙と釈義文の二つの部分に分けられる。本研究が釈義文だけに注目する理由は、釈義文は当時の一般的な言葉に近い述べ方を用いて、収録された字に対して解説を施したものである。従って、収録されている語彙と見出し語よりも当時の生活用語に接近していると思われる。本研究によって達成される目的は、次のようにまとめられる。

- (1) 字書及び辞典の釈義文字により、色彩語彙の組み合わせ形式を知ること。
- (2) 中国の言語文化的背景の下、字書及び辞典の釈義文字が示す色彩修飾語の形態を検討すること。
- (3) 上記の研究対象により、中国の色彩修飾語に関する基本的資料を構築、まとめること。

3. 研究対象の選定と研究方法

古字書を選択する際には、「小学」¹領域における重要性及び出版年代という2つの要素を考慮すべきである。錢劍夫^[5]、張明華^[6]の見解によると、「小学」領域における字書は形(文字)、音(音韻)、義(訓詁)の三類型に分けられる。「小学」領域の書籍総数の中、形類の字書が一番多く、次に義類であり、音類の字書が一番少ない。そのため、「小学」領域の書籍総数における形、音、義類の比率により、この三類型の字書の数を決める。上述の基準に基づき、孔子または戦国末期から漢初期の『爾雅』(完成年代未詳)、漢時代の『説文解字』(121年完成)、三国時代魏の『廣雅』(227年完成)、南朝時代梁の『玉篇』(543年完成)、宋時代の『廣韻』(1008年完成)、明時代の『正字通』(1671年完成)、清時代の『康熙字典』(1716年完成)^[7-13]を選択した。

この他、清時代末期には国際化に伴う文化及び経済

1 漢字の形、音、意味について研究する学問、字学。

交流の活性化により翻訳書が大量に出版され、社会科学や自然科学における新名詞が絶え間なく中国に伝えられた。そのため、当時の社会では新たな知識を理解する必要性から、近代辞典が誕生した。そこで、中国古代の色彩修飾語と近代のそれとを比較検討するために、海外文化が中国に導入された後に誕生した初の辞典である『辭源：正續編合訂本』(1939年完成)^[14]も加えた。この辞典は、近代辞書の代表的著作と評価されている。したがって、研究対象として、形、音、意味の三類型に属する字書・辞典がそれぞれ5冊(『説文解字』、『玉篇』、『正字通』、『康熙字典』、『辭源：正續編合訂本』)、1冊(『廣韻』)、2冊(『爾雅』、『廣雅』)の計8冊選定された。

研究方法に関しては、主に内容分析法を採用する。各字書・辞典の釈義文をページごとに網羅的に調べて、釈義文内にある色彩の表現に関連する文字を全て記録する。そして再びその中から色彩修飾語を分類し、中国字書・辞典における中国言語文化の色彩修飾語の形態を分析・把握していく。

4. 字書と辞典で示される色彩修飾語

4.1 色彩語彙の構成形式と修飾語の関係

調査の結果、7冊の古字書において色彩に関する約1,400箇条の釈義文が確認された。『辭源：正續編合訂本』に収録されている釈義文における色彩文字は約3,200箇条存在した。そして、色彩を表現する文字を一つずつ分類し、まとめた後に、字書及び辞典内の色彩語彙の構成形式を総合的に分析した。色彩文字の数は非常に多いので、比較しやすくするため、まず全ての色彩文字を分類し、グループにまとめた。具体的には、各単色語の現れる回数を記録した後、この頻度の多い単色語を類別として分類した。

古字書の単色語は青、赤、紅、黄、紫、緑、白、灰、黒となり、『辭源：正續編合訂本』のそれは青、藍、赤、紅、黄、褐、紫、緑、白、灰、黒となる。近代に入ると「藍」と「褐」の2つの色名が増加していることがわかった。しかし、調査した古字書において、「藍」の多くが「青色に染める植物」と解釈されており、「藍色」と解釈されている釈義文の出現回数は非常に少ない。また、「褐」は明時代の『正字通』に収録され、「黄黒色」と解釈されているものの、調査した多くの古字書の釈義文で現れた回数は非常に少なく、修飾語と組み合わせられた色彩語彙も存在しない。このため、「藍」と「褐」は類別には選ばれなかった。しかし、この2つの文字は

近代辞典『辭源：正續編合訂本』の釈義文には大量に現れているため、この2つの色彩文字を分類項目に入れた。

単色語を分析の基礎とすると、字書及び辞典内の色彩語彙は以下5種類から構成されることが判明した(以下()内の色彩名は例とし記す)。

- (1) 単色語(黒)
- (2) 修飾語および単色語と修飾語の組み合わせ：
 - a) 修飾語+色(暗色)
 - b) 色+修飾語(色暗)
 - c) 修飾語+単色語(暗黒)
 - d) 単色語+修飾語(緑暗色)。
- (3) 二色以上の組み合わせ：
 - a) 単色語+単色語(黄黒)
 - b) 修飾語+単色語+単色語(浅黧黒)
 - c) 単色語+単色語+単色語(灰黄緑色)
 - d) 色彩を描写する句(黄黒而白)。
- (4) 借物で比喻される色彩文字：
 - a) 物体+色または物体+単色語
(火色、玫瑰紅)
 - b) 修飾語+物体+色(嫩桑色)
 - c) 借物で陳述の句(若蒸熟之栗)。
- (5) (1)と同色系の色彩文字：
 - a) 単色語(縹、墨)
 - b) 修飾語+単色語(浅緋、浅赭)
 - c) 色彩を描写する句(色赭而淡)。

その中で、(4)の「単色語+単色語+単色語」形式は、近代の『辭源：正續編合訂本』のみに現れており、古字書にはこのような表現方法は現れていない。

上記の5種類の色彩語彙の構成形式において、(2)から(5)はすべて修飾語を運用し、色彩語彙を構成する仕方であるため、修飾語は通用性という特徴をもつと考えられる。そして、古字書内において5種類の色彩語彙の現れた回数は、それぞれ505回、336回、278回(この中に、修飾語を含むものが26個存在する)、165回(この中に、修飾語を含むものが1個存在する)、138回(この中に、修飾語を含むものが18個存在する)である。一方、近代辞典内において現れた回数は1,150回、1,039回、1,072回(この中に、修飾語を含むものが62個存在する)、491回(この中に、修飾語を含むものが6個存在する)、296回(この中に、修飾語を含むものが48個存在する)となった。これらの結果から、古字書、近代辞典のいずれにおいても、修飾語を運用して構成される色彩語彙は比較的多く、色彩を言い表す際に、修

飾語が重要な役割を果たしていることがわかった。

4.2 色彩修飾語の類型

古字書と近代辞典からまとめられた色彩語彙の構成形式は互いに類似しているものの、更に分類して分析すると、両者の修飾語の内容と数量には差異のあることが確認できる。

古字書の積義文において現れた類型は1.単語：(濃), 2.複合語：(浅薄, 赫赫)の計2種類に分類できる。その中、特別なものは、例としての「赫赫」は複合語のひとつ疊語に属し、同じ字を二回で使って、色を表している。全ての修飾語を挙げると、深, 浅, 竊, 純, 正, 濃, 淡, 暗, 闇, 盛, 太, 鮮, 艶(または豔と書く), 大, 嫩, 悪, 潔, 瑩, 焦, 甚, 微, 斑, 班, 雜, 中, 小, 反, 薄, 濁, 好, 上, 下, 短, 堅, 沃, 皮, 垢, 壞, 敗, 澤, 淨, 不純, 赫然, 鮮明, 鮮盛, 鮮潔, 潔鮮, 尤深, 充盛, 充厚, 浅薄, 瑩潔, 深悪, 不深, 不真, 不雜, 光滑, 光潤, 黯然, 赫赫, 皓皓, 翁翁然となり、合計すると41個の単語と21個複合語(3つの疊語を含む)となった。

また、近代辞典『辭源：正續編合訂本』で整理された修飾語は、単語、複合語(疊語を含む)の2種類以外に、3種類目となる句が存在し、例としては「純一不雜」などがある。同書の積義文から整理された修飾語は、深, 浅, 竊, 純, 正, 濃, 淡, 暗, 闇, 盛, 太, 鮮, 艶, 大, 嫩, 悪, 潔, 瑩, 焦, 甚, 微, 斑, 雜, 稍, 略, 澹, 明, 極, 重, 真, 媽, 澄, 清, 老, 汚, 欠, 花, 不純, 赫然, 鮮明, 鮮盛, 鮮熒, 鮮亮, 鮮妍, 最深, 特深, 深渾, 深沈, 深濃, 最浅, 濃密, 濃厚, 略淡, 甚淡, 稍淡, 微淡, 清淡, 暗昧, 黯淡, 甚豔, 鮮麗, 鮮美, 豔麗, 美豔, 殷麗, 姣豔, 純潔, 汚穢, 不鮮豔, 頗美豔, 薄薄, 皓皓, 翁翁然, 湛湛然, 嬌豔可愛, 純一不雜, 濃淡不一, 濃淡非一の計37個の単語, 37個の複合語(4つの疊語を含む)と4つの句となった。

4.2.1 常用の色彩修飾語

常用の中国色彩修飾語を理解するために、まず古字書と近代辞典の積義文に重複して現れる修飾語を整理する。また修飾語がその中に現れる頻度により比較研究を行った。

古字書と近代辞典の比較調査の結果、両者に重複して現れるのは、深, 浅, 竊, 純, 正, 濃, 淡, 暗, 闇, 盛, 太, 鮮, 艶, 大, 嫩, 悪, 潔, 瑩, 焦, 甚, 微, 斑, 汚, 雜, 不純, 赫然, 鮮明, 鮮盛, 皓皓, 翁翁然, の計24個の単語, 6つの複合語(2つの疊語を含む)であっ

た。これにより、これらの語彙は古代から近代まで普遍的に使用されてきたことが推測できる。

一方で、8冊の字書及び辞典の積義文内容は古典文献の資料を引用して説明されているものの、大部分が編集する際に熟知されている文体語彙で編集されている。修飾語の現れる回数を合計すると、修飾語が使用されている頻度がわかる。歴代の重要な古字書においては、「浅」が最も現れる回数の多い修飾語であり、計78回であった。以下、「深」は47回、「鮮」は22回、「大」は19回、「純」は13回、「微」は10回、「鮮明」は9回、「盛」は6回、「中」は6回、「澤」は6回、「濁」は5回、「小」は5回、「暗」は5回、「浅薄」も5回となっている。近代に入ると、『辭源：正續編合訂本』における彩度について、「淡」の出現頻度が最も多く計443回となった。その後、「深」, 「暗」, 「微」, 「純」, 「浅」, 「正」, 「鮮」, 「濃」と続き、それぞれ153回, 138回, 105回, 61回, 59回, 53回, 53回, 33回現れている。これにより、現れる回数の多い修飾語は、字書・辞典が編集された時代、より熟知・常用されていたものであることが推測される。

4.2.2 色彩修飾語の組み合わせ

上述の調査結果をまとめて比較すると、古字書であっても近代辞典であっても、色彩修飾語と単色語との合成で色彩語彙を構成するとき、修飾語はほぼ単色語の前に置かれていること、すなわち、「修飾語+単色語」という形式で色彩が表現されており、「単色語+修飾語」の方式は比較的少ないことが窺えた。古字書の積義内容を整理してみると、絳浅, 黒甚, 青浅色, 白鮮色, 黒暗色, 黄濁黒, 淡黒浅色の僅か7つであった。また近代辞典では、紅甚, 赤色盛貌, 赤色赫然, 色灰暗, 紫暗色, 緑暗色, 色黄帶暗の僅か7つであった。

この他にも、「副詞+形容詞」というタイプの修飾語が確認された。古代字書の積義内容には、紅色之尤深, 色不深, 色不真, 色不純, 色不雜というものがあり、他方、近代の『辭源：正續編合訂本』には、最深之紅, 特深紅, 墨色最浅, 色甚淡, 紅色之略淡, 色稍淡, 色微淡, 不雜, 色不純があった。形容詞の前に副詞を加えることで程度の異なった明度や彩度を表現しており、色彩の深淺・濃淡をより多くのグラデーションに分類することができるため、より簡単に色彩を理解することができる。上述の尤, 不, 最, 特, 甚, 略, 稍, 微を、表す程度が高いものから低いものへと並べてみると、「最」が一番高く、それに「特」, 「尤」, 「甚」と続く。程度が比較的低いのは「稍」, 「略」, 「微」である。一方、

「不」は否定の意味を表しており、例えば、「色不純」とは色彩の純度が高くないこと、すなわち彩度が低い色彩であることを示している。

4.2.3 古代の色彩修飾語の特色

多数の古字書の内容を調査・分析すると、中国古代の一部の修飾語は字書の見出し語に現われていることが確認できる。例えば、見出し語「登絶」の釈義文は「色不深」であり、これは色が深くなく、浅いことを示す。それ以外では、「絶」は色が深く悪いこと、「光」は上等な色、「通」は色が純粋であること、「甞」は色が斑になっていること、「縹」は色が鮮やかであること、「肥」と「絶」は色が不純であること、「醇」は色が混ざっていないこと、「彰」、「穢」、「繁」は鮮明さ、「爛」は不純で色が雑多であること、「黧黧」は色が劣っていること、「艶艶」は色が悪いことを形容している。上述した語は色彩文字と組み合わせられずに、ただ色の現れた様子を表現する。近代辞典『辭源：正續編合訂本』の時代になると、このような見出し語はほぼ淘汰されて使用されておらず、掲載されているのは「爛」の一語のみである。ここから、色彩修飾語の形式と数量が時代の流れとともに変化していることが窺える。

4.3 色彩の三属性と修飾語の関係

4.3.1 色彩の属性による修飾語の観察

色相、明度、彩度は合わせて色彩の三属性と呼ばれる。次は色の三属性の角度から、古字書と近代辞典における色彩修飾語を分析する。まず、修飾語を色属性で分ける。色彩修飾語を分類するとき、字書や辞典では色彩に関わる定義や説明があると、それを参照し、分類の基準となると考える。しかし、なかった場合は現代色彩学を利用し、類別を決める。明暗程度の示すものを明度に、色彩飽和度に関連する語彙を彩度に区別する。この他にも、明度と彩度の複合の語彙を整理した。また質感、イメージ、評価といった項目に関する修飾語をまとめた結果はTable1,2のように示している。

色彩の修飾語を分類すると、彩度の修飾語の数は明度の修飾語より多いことがわかった。ただし、これは現段階で古字書、近代辞典の記述により、推測されるものである。現代における修飾語の意味との相違はどのように存在するかを今後詳しく検討する必要があると考えている。

Table 1 古字書の色彩修飾語と色彩属性の関係

属性	古字書の色彩修飾語
明度	低明度：深，尤深，暗，闇，黯然
	中明度：中
	高明度：浅，竊，潔，不深，皓皓
彩度	低彩度：淡，薄，微，濁，不純，不真
	高彩度：正，純，濃，鮮，盛，鮮盛，充盛，充厚，大，太，甚，艷，黠
明度と彩度の複合	鮮明，鮮潔，絜鮮，浅薄
色彩の関連項目	1. 質感：瑩，光滑，沃，澤，焦，赫然，赫赫，翁翁然 2. イメージ：嫩，汚，瑩潔，淨，垢，堅 3. 評価：好，壞，惡，上，下，深惡，敗，短 4. その他：雜，不雜，斑，班，小，反

Table 2 近代辞典の色彩修飾語と色彩属性の関係

属性	近代辞典の色彩修飾語
明度	低明度：深，特深，最深，深沈，暗，闇，暗昧
	高明度：浅，最浅，竊，潔，明，皓皓
彩度	低彩度：淡，甚淡，略淡，稍淡，微淡，澹，清淡，薄薄，微，稍，略，不鮮豔，不純
	高彩度：正，純，純一不雜，濃，濃密，濃厚，鮮，盛，鮮盛，大，太，甚，極，重，真，嬌，艷，甚艷，豔麗，鮮妍，鮮麗，鮮美
	彩度と評価の複合：美豔，頗美豔，姣豔
	その他：濃淡不一，濃淡非一
明度と彩度の複合	鮮明，鮮熒，鮮亮，深渾，深濃，黯淡
色彩の関連項目	1. 質感：瑩，光潤，澄，澄明，清，焦，湛湛然，翁翁然，赫然 2. イメージ：嫩，老，汚，汚穢 3. 評価：惡，純潔，欠，嬌豔可愛，殷麗 4. その他：雜，斑，花

4.3.2 明度と彩度に関する修飾語

明度の修飾語において、「竊」と「中」の2文字が比較的理解しにくいいため、更なる説明を行う。「竊」は古字書及び近代辞典釈義文において、いずれも古字書『爾雅』と史書『左傳疏』の内容から引用されており、色彩文字と組み合わせ、「竊丹」、「竊玄」、「竊脂」、「竊黄」、「竊藍」の5つの語を形成し、鳥の一種である「鷹」の羽毛の色彩を表現している。明朝の楊慎氏は『轉注古音略』において、「竊，即古浅字（竊とは浅の古字である）」と説明していることから、「竊」は今日の「浅」の古字であることがわかり、意味は「浅」と同様である。この他、高明度に分類される「中」という字は、黒色と組み合わせられて、語の「中黒」となり、『説文解字』と『康熙字典』の2冊の字書に現れている。『説文解字』の黒部にお

る「黧」という字の意味は「中黒」であり、『康熙字典』では『集韻』の内容が引用されており、黒部における「黧」の字の意味は「中黒」であると解釈されている。「中」の字には中にいるという意味があり、白と黒を明度値の両端とするとき、「中」は高明度と低明度の中間点、すなわち灰色色彩であると推測される。

明度と彩度のみを言い表す修飾語以外にも、明度と彩度の複合の修飾語語彙があり、明度と彩度の意味を表す単語が組み合わされている。例えば「鮮潔」は、「鮮」が彩度を示し、「潔」はもともと清潔な様子を意味し、色彩を言い表す場合、明度が高い色彩を形容している。「鮮」と「潔」という2つの字の意味を合わせて、彩度と明度の両方とも高い色彩を形容している。

4.3.3 色彩の関連項目について

前文で述べたものは全て単純に色彩の属性に関する論述であるが、実際の生活において、色彩は各種物事の表面に付随して存在しており、単独で存在することはない。そのため、人々は色彩を見たとき、視覚で色相、明度、彩度を感知する以外にも、物事の表面の質感を感じながら、各色彩に対して各種イメージや評価を連想していく。

表面の質感を表現する語である「瑩白」と「光白」は、いずれも透明で明るい白を形容しており、「沃」、「澤」、「光滑」、「光潤」は表面に光沢があり滑らかな様子を意味しており、例えば、「沃黒」、「黒而澤」、「白澤」、「色光滑」と「色光潤」がある。一方、高い透明度に関連する修飾語には、澄、澄明、清、湛湛然があり、その特徴は文字の部首がすべて「さんずい」であることである。また、澄、清、湛の3つの文字は澄んでいて、はっきりとした様子であることをもともと意味する。これらは色彩を表すときに高い透明度の色彩を形容する。色彩の単語で構成される語としては、「澄赤」、「水色澄碧」、「澄明微黄」、「澄明黄褐色」、「澄明略黄」、「色縹清」、「色清黒」、「湛湛然黒色」がある。一方、翁翁然は低い透明度を意味する。この語は『康熙字典』の「翁」、「盎」及び『辭源：正續編合訂本』の「蔥白」、「盎齊」、「鄧白」の5つの見出し語に現れている。清時代の文字・訓詁学者であった段玉裁氏は『説文解字』において、「盎」に対して『周礼』を参考しこの意味を解釈した。すなわち、『周礼』では、盎齊の盎は翁という意味であり、翁翁然また蔥白色でも表しているが、現在、鄧

白を形容している。翁は滃の借用で、酒の色に似ている。」²と説明されている。さらに、『周礼』の解釈を深く分析すると、盎齊は五齊の一つである。五齊は清酒に対する濁酒を指している。また翁は滃の借用であり、滃滃とは酒の色が濁っているという状態を表すため、「翁翁然」は渾濁した様子を形容している。なお、蔥白色は「翁翁然」と同じ意味なので、混濁する様子を示している。

イメージという項目とは、色彩が人に与える印象に関連した文字であり、人の主観的評価と関連しているものである。例えば、柔らかい印象を表現する「嫩」という字では、「嫩黄」、「嫩紅」、「嫩緑」といった語が存在している。また「色老」は古い色彩を象徴している。色彩が清潔な印象のある場合、「瑩潔」、「浄」といった語で言い表され、汚い印象の色彩は、「垢」、「汚」、「汚穢」で形容されている。例えば、「垢黒」、「汚褐赤色」、「汚穢青灰白色」といった語がある。「堅」はイメージを表現する修飾語の中でやや特別な存在であり、古くは東漢時代の『説文解字』における現在の「黠」という文字の積義文「黠、堅黒也。」の中にすでに現れている。「堅黒」が描写するものは、黒色の色彩が持つ固い印象であることが推測される。また古代中国では染色技術が盛んであったため、「堅黒」は黒色の色彩が濃厚で色褪せない様子を示すとも推測される。その後の『玉篇』、『廣韻』、『正字通』及び『康熙字典』にも同様の解釈が記載されているものの、現在、「堅」を色彩修飾語として表す方式はすでに存在しない。

一方、評価として分類されるものは、色彩の優劣、善悪、美醜に関連する修飾語であり、その中でもプラスの評価のものが比較的多い。構成される語の例としては、「白好」、「上色」、「色嬌豔可愛」、「色彩美豔」、「殷麗之色」などがある。マイナスの評価のものは少なく、壞、悪、深悪、下、敗、短、欠の計6つの単語と1つの複合語のみである。構成語は、「色壞」、「色悪」、「下色」、「色深悪」、「色敗」、「短黒」、「欠翠」である。このうち「短黒」は「纂」の積義文であり、『説文解字』にはすでに収録されている。「短」は喪失、不足、浅薄という意味があるので、黒色を形容している場合に、黒色の色彩明度が足りない状態か、染色色彩が美しくない状態を指していると考えられる。

最後に、その他の修飾語の分類の中には、色彩が純粹でほかの色彩が含まれていないものもある。例えば、

2 原文は「周禮盎齊注曰。盎猶翁也。成而翁翁然。蔥白色。如今鄧白矣。按翁者。滃之假借。滃滃猶決決也。酒之成似之。」

雑，不雑であり，例としては，「色雑」，「色不雑」がある。一部の単語は色彩が事物に散らばっている様子を表現している。斑，班，花のように，色彩が種類ではなく，ほかの色彩が入り混じって存在している様子を示しているものがある。調査した字書及び辞典からは，「斑白」，「青斑色」，「烏斑色」，「班黒」，「花白」といった語が確認された。そのほか，このような修飾語には「小」と「反」がある。「小」は『説文解字』などの古字書の「点」の積義文において，黒色と構成される語「小黑」がある。小は大に相対しており，「大」が言い表すものは色彩の彩度が高いというものであるが，「小」は彩度値を示すものではない。段玉裁氏は「点」に対して「点は小さくて黒い点である。現代の点の俗称は洩であり，または玷である。」³と注解している。いわゆる點洩は汚点の意味であり，この言い方により，「小」が言い表すのは黒色の面積範囲が小さいという状態である。なお，「反」については，字書における解釈や関連する説明を示されておらず，ほかの参考資料も極めて少ない現状にあるために，現時点で，その意味を推測するのが困難であると思われる。『正字通』及び『康熙字典』の僅か2冊の積義文において「緋，反絳也。」と掲載されているが，詳細な説明がない。また，現在「反」を用いて色彩を形容することはなく，「反」の意味を適切に想定することはできない。

4.4 色彩類別による分類と分析

4.4.1 修飾語を分類する

以下では修飾語と色彩の関係を理解するために，色彩によって修飾語を分類し，それぞれ分析を行う。字書や辞典からまとめられた修飾語の一部は単独で積義文に現れている。色彩文字と組み合わせて語彙は作られていない。例えば，『辭源：正續編合訂本』における見出し語の「黄道光」に関する積義文では，「天空所現奇異之光輝……色清淡……（空に現れた不思議な光……色が薄くて透けている……）」と書いており，何らかの色彩に関する説明ではなく，単に色彩がさわやかな様子を描写している。修飾語と色彩の組合せを探究するとき，修飾語と色彩の間に特別な関係はあるのであろうか。上述した単独に表れている修飾語に対する解析はできないので，このようなものは除外することにする。色彩の分類は本稿4.1における色彩語彙の構成類型を解析したときの設定を再利用する。古字書の

修飾語は青，赤，紅，黄，紫，緑，白，灰，黒の9色に基づいて分類する。『辭源：正續編合訂本』を青，藍，赤，紅，黄，褐，紫，緑，白，灰，黒の11色に基づいて分類する。

上述したことに基づき，色彩と組み合わせられるすべての修飾語を，組み合わせた色彩によって分類する。分類できない色彩がある場合，色彩に基づいて近い色彩に分類する。例えば，青，紺，縹，蒼などの単色語の修飾語は「青」という類別に記した。それから，再度，色彩類別文字を組み合わせた修飾語を整理し，各色彩類別の色彩文字単色語と修飾語の間に特定の関係が存在しているか否かを比較，分析した。古字書と近代辞典をそれぞれ整理した結果はTable3.4の通りである。

以上のように整理した結果，古字書の各色彩類別内で多く使用されている修飾語は「深」，「浅」，「正」の3文字で，また近代辞典の各色彩類別には「淡」，「微」，「深」と「暗」が使われた場合も多いことが窺えた。この5つの修飾語は多数の単色語を形容するとき用いられるものであることが明らかとなった。

4.4.2 修飾語が多い色彩類別

古字書においては，黒色と関連する修飾語が最も多く，それぞれ異なるグラデーションの黒色色彩や表面質感を表現しており，黒色への認知と判断が古くから極めて精密であったことが窺える。

一方，近代辞典では紅に関する修飾語数が最も多い。『説文解字』の説明によると，「紅」の解釈は「帛赤白色也（絹織物の赤白色）」であり，絹織物の色彩とは赤色と白色の間，いわゆる現在のピンクに当たる。初期の「紅」は，綿織物に染めた色彩を表現するもののみを指し，ほかの物体の色彩表現には使用されていない。しかし，時間がたつにつれて，「紅」は徐々に通用性の色彩形容単語となり，各種の事物の色彩を表現し，色彩も最初のピンクから鮮紅色に変わり，「赤」が表現する色彩に取って代わった。古代及び近代における赤と紅の2つの修飾語を比較・分析すると，「紅」の場合は「赤」より多く使われていることがわかった。このことから，中国の古代において，紅という語は利用率がすでに高いと推測される。ほかの史料からも，「紅」は「赤」の代わり，赤い色を表現する時期が凡そ古代初期に遡れると証明できるだろう。例えば，漢時代の『史記・司馬相如列伝』では，「紅杏渺以眩潛兮，焱風涌而雲浮。」と

3 原文は「點，小黑也。今俗所謂點洩是也。或作玷。」

Table 3 古字書における色彩類別によって分類した修飾語

	青	赤	紅	黄	紫	緑	白	灰	黒
低明度	深	深	深, 尤深	深	深	深	潔		深, 暗
中明度									中
高明度	浅	浅, 竊	浅	浅, 竊	浅	浅	浅, 竊, 皓皓		浅, 竊
低彩度	淡		淡, 微	淡, 濁, 微			微		淡, 濁, 微
高彩度	純, 正	純, 正, 盛, 大		正		正	純, 正, 鮮, 大, 太	純	純, 正, 甚, 濃, 大, 豔
両方の複合				鮮明					
質感		赫然	赫然, 赫赫	焦			澤, 瑩, 淨, 翁翁然		澤, 沃, 焦
イメージ				嫩					汚, 垢, 堅
評価			悪		悪		好		短, 敗
その他		小	小, 反				深		小, 斑

Table 4 近代辞典における色彩類別によって分類した修飾語

	青	藍	赤	紅	黄	褐	紫	緑	白	灰	黒
低明度	深, 暗	深, 暗	深, 暗	深, 特深, 最深, 暗	深, 暗	深, 暗	深, 最深, 暗	深, 暗, 深沈		深, 暗	深, 暗
高明度	浅		浅, 竊	浅	浅, 明, 竊		浅	浅, 明	浅, 潔, 皓皓		浅, 最浅
低彩度	淡, 微	淡, 竊, 微, 略	淡, 微	淡, 略淡, 澹, 微, 薄薄	淡, 微, 稍, 略	淡, 微	淡, 微	淡, 微	淡, 竊, 微	淡, 微	淡, 竊, 微
高彩度	正, 純, 極	濃	正, 純, 太, 大, 盛	濃, 正, 純, 鮮, 大, 真, 甚, 極, 媽, 鮮妍	濃, 正, 純, 鮮, 極	濃	正, 純, 鮮, 鮮麗, 鮮美	濃, 純, 鮮	正, 純, 鮮, 太, 甚, 極		濃, 純, 正
彩度と評価の複合				姦豔							
両方の複合							深渾	鮮明			
質感			澄, 赫然					澄	瑩, 翁翁然		清, 湛湛然
イメージ			汚	嫩	嫩			嫩	潔, 汚穢		
評価							悪	欠	純潔		
その他	斑								花	斑	斑

いう言葉があって、また南朝宋時代の裴駰は『史記集解』において、晋時代の晋灼の言い方「紅, 赤色貌」を引用し、すなわち、「紅」は赤色の様子で、赤色を使って、紅を解釈する証である。これは晋時代に、「紅」はすでに「赤」を取り替る傾向があったのではないかと考える。

4.4.3 修飾語と色彩の関係

相互に比較することで、修飾語と色彩文字の組み合わせの規則も観察することができ、その中でも特に明度関連の修飾語がより明確となっている。古字書と近代辞典の内容を総合すると、色彩明度を表す白・灰・黒の修飾語において、白色を形容する修飾語には「暗」

と「濃」は現れない。また、灰と黒の2色に「明」や「鮮」といった表現の方式もない。色の3属性の角度から分析すると、白・灰・黒は無彩色に属し、彩度値がなく、明度値のみがある。白色から黒色へ、明度値は最も明るいものから最も暗いものへと変わっているの、白色は「暗」と「濃」では表現されず、灰・黒は中低明度の色彩であり、「明」や「鮮」といった文字と組み合わせされない。

しかし、漢字は「一字多義」の特徴をもち、色彩修飾語にも一字二義の現象が存在している。例えば、調査結果において、古字書『康熙字典』に収録されている「皚」の積義文の内容は『集韻』浄也一日深白也(浄とは深白とも言える)。』と載っている。『康熙字典』は宋時

代『集韻』の内容を引用して、「皚」の意味は清潔、純粹であり、もう一つが深白色と解釈している。白色は高明度の色彩で、「深」は低明度を表現する修飾語であり、「深」で白色を表現する方法は、現代の色彩学の角度からは不合理であると思われる。しかし、古字書内の「深」に関する解釈を総合すると、「深」には「浅」の反対の意味や「奥深く微細である」という意味、そして「隠蔽」といった意味が含まれており、さらに「非常に」という意味もある。『集韻』内の「深白」の言い方を推測すると、「深」は低明度を指すのではなく、「非常に白い」、「純粋な白」であると解釈したほうが適切であろう。

この他、「正」は時代とともに表現する色彩の種類が増えている。清時代の桂馥氏は『説文義証』の中で、漢時代の環濟氏の『要略』を引用し、正色は五つ色があり、青、赤、黄、白、黒の5種の色彩を指し、また五間色は紺、紅、縹、紫、流黄を指した。「正」は古代において、「間」と対になっている。調査した古字書において、正赤、正黄、正緑、正白、正黒の5つの語が現れており、近代辞典に到って、『辭源：正續編合訂本』中で「正」は青、赤、紅、黄、紫、白、黒の計7種類の色彩文字を形容している。このため、古代と近代の調査資料を総合すると、「正」は五正色を表現する以外に、緑色と元々間色に属していた紅色と紫色も「正」で表現されている。現れる時間の前後から説明すると、五正色の表現の仕方は先秦兩漢時代の前にすでに現れており、『禮記・玉藻』では「衣正色、裳間色。」と書かれており、唐の学者孔穎達^[15]は注釈をつける際、南北朝時代の学者皇侃が言った「正謂青、赤、黄、白、黒五方正色也。」と引用している。調査した字書内の正緑、正紅、正紫は、成書年代が比較的遅い古典文献から引用されており、正緑が表れるのは明時代の『本草綱目註』で、正紫はその中で3回が出ており、それぞれ宋時代の『清異録』と『陸游牡丹譜』、清時代の『天祿識餘』で引用されている。正紅は明時代『徐應秋談薈』で引用されている。すでに89冊分の先秦兩漢時代の古典文献データベースをリサーチしたものの、正緑、正紫、正紅の3つの語は確認されていない。上述の内容をまとめて考えると、「正」は中国古代における最初の五正色を表現するのみに限定されていたが、その後、純色の色彩に対する形容に用いられていることから、黒や白が加えられていない色彩であると推測できる。

色彩自体の物理属性以外でも、色彩は人間心理に様々な感情を表現したり、事物を連想させることがある。修飾語が組み合わせられた色彩にも影響を与えてい

る。例えば、修飾語の「潔」には明るく清潔なイメージという意味が含まれている。また「浄」にも清潔という意味がある。従って、両者は色彩と組み合わせられたとき、「潔白」、「浄白」のように、高明度で清潔な印象の色彩が表現される。一方、両者は、灰、黒、褐といった色彩とはいっしょには連結されない。また、修飾語の「嫩」に関しては、調査データにおいて、嫩紅、嫩黄、嫩緑の3つの語が現れている。「嫩」は浅くて瑞々しい色を形容している。また「嫩」は物体が生まれたばかりのときのように弱弱しくて繊細な姿を形容しており、近いイメージを持った色彩との組み合わせでのみに適用されている。

色彩属性及び心理的印象の影響以外にも、一部の修飾語と色彩文字の間には一対一の対応関係がある。例えば「嫣」はもともと美しく、艶やかな様子を形容している。色彩を言い表す場合には、紅のみと組み合わせられ、「嫣紅」という語を形成する。その意味は艶やかな赤である。また、「花」も色彩が入り混じった様子を形容することができるものの、白色と組み合わせられた語「花白」は、黒と白の2色が混合した様子を意味している。特に「花白」は灰白色の頭髪を形容するとき多用されている。

5. 結論

中国の色彩修飾語の使用及び発展状況を理解し、その特色を把握するために、歴代の重要な中国の古字書7冊と近代辞典1冊を研究のベースとして、各書籍の解釈に対して色彩修飾語の調査分析を行った。分析した結果として、古字書と近代辞典をトータル的にまとめた後、色彩語彙は5つの類型に分類できることが判明した。修飾語の出現回数により、修飾語の色彩語彙構成における重要性が理解できる。一方、古字書と近代辞典のデータの比較から、古今の色彩修飾語の発展過程と共通点を確認し、発展過程においては、修飾語のスタイルの変化を捉えることができた。

古字書には41個の単語、21個の複合語(3つの疊語を含む)が含まれており、そして、近代辞典からは37個の単語、37個の複合語(4つの疊語を含む)と4つの句が整理された。近代辞典編纂の時代背景は、まさに言語が文語文から徐々に会話文となった年代であり、複合語と句の数が近代辞典において非常に増加していた。特に「副詞 + 形容詞」タイプの複合語が大量に運用されている。それに、中国古代においては専用単語及び複合語で色彩状態を表す場合、例えば、「肥」は「色

が不純であること」という意味を指しているが、これは近代辞典においてはすでにほぼ淘汰され、使用されていない状況にある。共通点としては、古辞典と近代辞典に同時に存在するのは、24個の単語、6つの複合語(2つの豊語を含む)となっている。全てを挙げると、深、浅、竊、純、正、濃、淡、暗、闇、盛、太、鮮、艶、大、嫩、悪、潔、瑩、焦、甚、微、斑、汚、雜、不純、赫然、鮮明、鮮盛、皓皓、翁翁然となる。このため、これらの語は古代から近代に至るまで、代表的かつ重要な色彩修飾語であると言えることができる。その中で、「浅」、「深」、「鮮」、「淡」、「暗」の現れる回数が比較的頻繁であることから、これらは常に使用されてきた修飾語ではないかと考えられる。

また、本稿では色彩修飾語の属性を分類した上で、色彩類別に基づき分析し、色彩修飾語の特徴の理解を試みた。これにより、中国の色彩修飾語は、描写の特性、意味の解釈、組み合わせのいずれにおいても、多様な性質を具備しており、規則を探し出すのが比較的困難である、ということを発見した。彩度を表す修飾語の数は明度の描写より多く、また色彩の質感、イメージや評価などを表現する特性をもつ修飾語が多数存在することが窺えた。色彩類別の角度から考察すると、一部の修飾語と色彩文字の間には「一対一の専属関係」が存在している。それに対して、各色彩類別で多く使用されている修飾語もある。例としては、古字書における「深」、「浅」と「正」、近代辞典における「淡」、「微」、「深」と「暗」がある。最後に、漢字の「一字多義」という特性は、色彩修飾語の意味に対する解釈をさらに豊かに、そして多様化させている。

参考文献

- [1] 駱峰. 漢語色彩詞的文化審視. 上海辭書出版社, 2004, 188p, pp.15-17.
- [2] 呂清夫. 系統色名の研究(第二報). 日本色彩学会誌. 1996, Vol.20, no.3, pp.114-123.
- [3] 林岱瑩. 色譜・中国色名綜覽與中国の伝統色之色名比較研究. 国立雲林科技大学視覚傳達設計研究所修士論文. 2006.
- [4] 李紅印. 現代漢語顏色詞語義分析. 商務印書館, 2007, 373p, pp.313-357.
- [5] 錢劍夫. 中國古代字典辭典概論. 商務印書館, 1986, 373p, pp.75-78.
- [6] 張明華. 中國古代字典詞典. 台灣商務印書館, 1995, 158p, pp.57-86.

- [7] 郭璞注. 爾雅注疏(上・下). 台灣古籍出版有限公司, 2001, 208p・216p.
- [8] 許慎, 段玉裁注. 新添古音說文解字注. 增修版, 洪葉文化, 1998, 1065p.
- [9] 張揖, 王念孫注. 廣雅疏證. 江蘇古籍出版社, 2000, 526p.
- [10] 顧野王. 玉篇. 第4版, 台灣中華書局, 1982, 436p.
- [11] 陳彭年. 新校宋本廣韻. 洪葉文化, 2001, 1082p.
- [12] 張自烈, 廖文英編. 正字通. 中国工人出版社, 1997, 1686p.
- [13] 張玉書. 康熙字典. 第2版, 中華書局, 2001, 1611p.
- [14] 商務印書館編審部. 辭源正續編合訂本. 台灣商務印書館, 1958, 1955p.
- [15] 孔穎達. 禮記正義. 十三經注疏本. 藝文, 1995, p.313.

(投稿受付日: 2013年7月16日)

(掲載決定日: 2014年7月23日)

著者紹介



りん せつみん
林 雪雰

台湾雲林科技大学大学院視覚傳達デザイン研究所修了. 修士(設計学). 現在, 同大学設計学研究所博士在籍, 正修科技大学時尚生活創意デザイン学科講師. 専門は色彩学, 中国伝統色, ブランドデザイン.



そい けいゆう
曾 啓雄

兵庫教育大学大学院芸術教育研究科修了. 修士. 現在, 台湾雲林科技大学視覚傳達デザイン学科教授. 専門は色彩学, デザインと文化, 中国伝統染色技法.